平成 26 年 5 月 15 日

研修旅行でお世話になった愛媛大学の野見山先生の研究が新聞に掲載されました

ニホンザル：胎児からＰＣＢ　霊長類では初検出　愛媛大のグループ、発達障害の研究に

毎日新聞　2014 年 05 月 14 日　大阪朝刊

愛媛大沿岸環境科学研究センターの野見山桂講師らのグループが、ニホンザルの胎児からポリ塩化ビフェニール（ＰＣＢ）とその代謝物の水酸化ＰＣＢを検出した。霊長類の胎児では初の報告例。１４日から京都市で始まる日本環境化学会環境化学討論会で発表する。ヒトでは発達障害と胎児期～幼児期のＰＣＢ摂取の関連が指摘されており、こうした研究の基礎資料となることが期待される。

ＰＣＢは環境ホルモンの一種で、環境中で分解されにくく体内に蓄積されやすい。グループは一昨年と昨年、四国で有害動物として駆除されたニホンザルのうち妊娠中７個体の提供を受け、胎盤▽羊水▽胎児の脳と肝臓―を調査。試料全てからＰＣＢと体内に取り込まれてできる水酸化ＰＣＢを検出した。

特に中期・後期胎児の肝臓から検出されたＰＣＢ総量が３８０～６６０ピコグラム（ピコは１兆分の１）と高い値を示し、水酸化ＰＣＢも高かった。グループの野見山講師は「ヒトはニホンザルよりＰＣＢの蓄積量が多く、胎児にもより多く取り込まれると類推される」と分析。脳神経系の発達に影響する可能性を指摘している。【松倉展人】